

中国の砂糖消費もテイクオフの時期へ

主席研究員 阮 蔚

1 中国の少ない砂糖消費のなぞ

世界にはいろいろな「七不思議」があるが、食料分野の「七不思議」のひとつは、中国の砂糖消費だろう。中国の食料の一人当たり消費量はコメ、小麦、大豆、食肉などほとんどの品目で先進国か、それに近い水準に達している。特に豊かさのバロメーターとされる食肉消費量は、1980～2000年の20年間に所得の伸び率を上回るスピードで大きく増加し、すでに日本を上回る水準になっている。しかし、砂糖消費はまったく異なる様相を呈している（第1図）。

国連食糧農業機関（FAO）の統計によると、2009年に中国の一人当たり砂糖（異性化糖含む、以下は同じ）消費量は年間6.6kgで、米国（64.2kg）やスイス（59.1kg）、フランス（41.2kg）などの先進国はもちろん、一人当たりGDPが中国を大きく下回るインド（21.6kg）やベトナム（12.1kg）、ミャンマー（8kg）よりも低く、世界で第165位にすぎない（第2図）。

米国の砂糖大量消費は食事をみれば歴然としている。デザートのアイスクリュームやケーキ、おやつクッキー、ドーナツやチョコレート、さらにコーラなどのソフトドリンク。

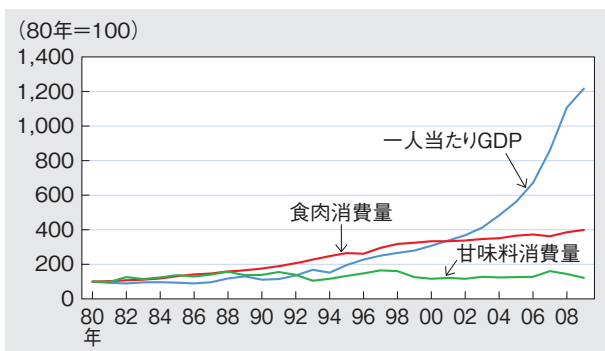
生活のあらゆる場面に砂糖など甘味料を大量に含んだ甘い食品が顔を出している。甘さ控えめで、上品さ、繊細さを特徴とする和菓子が示すように、日本の砂糖消費は米欧諸国に比べれば少ないが、それでも09年に一人当たりで27.8kgと中国の4倍強。どの国でも経済が成長するにつれ、砂糖消費量は増えるという経験則があるが、中国だけは例外だ。穀物、肉、マグロからワインまで様々な食の消費を急増させ、世界から買い漁った結果、“爆食”と揶揄される中国で、砂糖だけは消費量が伸びないのはなぜか。

2 中国は「低糖」の食文化

筆者が湖南省で過ごした少女時代や上海で過ごした大学生の頃、おやつとしてよく食べたのは、落花生やヒマワリなどの種、かりんとう、甘酸っぱい梅干し、山査子^{さんざし}の味のするほんのり甘い薄い小ぶりのおせんべいなどだった。中国がまだ貧しかったこともあるが、中国の食文化に「甘さ」を抑える要因があったためでもある。

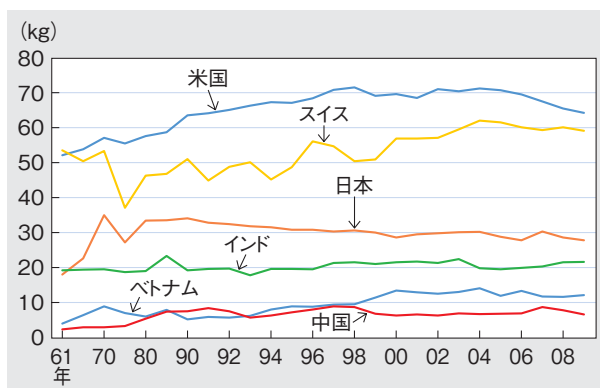
中国の家庭ではお祝い事や客をもてなす時に無理をしても食肉を必ず出す。中国の食文

第1図 中国の一人当たりのGDP、食肉と甘味料消費量の増加状況



資料 FAOSTAT, IMF
(注) 甘味料は、Sugar+Sweetenersの合計。

第2図 一人当たりの年間の砂糖消費量



資料 FAOSTAT
(注) 砂糖は、Sugar+Sweetenersの合計。

化のこだわりは食肉にある。中華料理は香ばしさ、辛さ、酸っぱさを特色としており、一部の沿海地域を除けば料理に砂糖をほとんど使わない。湖南省の友人が訪日した時、日本料理のなかでも中国人の好む肉料理と思い、すき焼きに連れて行ったら失敗だった。「味付けが甘すぎる」と言ってほとんど口にできなかったのだ。日本食では砂糖、みりんなどの甘味が隠し味となっているが、中国人にはその甘さが苦手という人が少なくない。

また、中国の食文化には「医食同源」の考えがあり、子供に甘いものを与えず、一日三食をしっかりと食べることを重視する。お菓子を表現する言葉にもそれは表れている。日本ではおやつは「間食」で、昼食と夕食など食事の間のエネルギー補給といったイメージがあるが、中国では「零食」と呼ばれている。「零」とは「わずかなもの」「ささいなもの」を意味しており、お菓子の位置づけは本当に小さい。

3 世代交代で需要爆発の懸念も

だが、中国でも都市部では食生活に洋風化への大きな変化が起きている。この5年ほど中国に行くたびに街中で感じるのは肥満児の急激な増加だ。コーラ等ソフトドリンクの消費が急増しているだけでなく、ケーキやドーナツ、アイスクリームを売る店は今や上海、北京など大都市の繁華街には数軒おきにある。今の中国の若い世代の甘い物への志向は日本以上で、肥満児の比率は日本の2倍以上という印象がある。

中国で世代間ギャップを語る時にしばしば使う「90后(90年代の生まれ)」は甘い物への志向、砂糖摂取量を分ける基準の世代にもなるだろう。すなわち、中国では砂糖消費が増加する時期が始まったのだ。中国の一人当たりの砂糖消費はこの数年で跳ね上がり、12年にすでに11kgになっているという。

4 価格競争力を欠く中国の砂糖生産

中国は砂糖の世界的産地であり、生産量(12年)は1,419万トンとブラジル、インドに次ぐ

第3位、世界の砂糖生産量の7.9%を生産している。生産量そのものは80年代以降、確実に増えているものの、人件費の増加、さとうきび農家の零細性、政府支援の不足などにより、穀物と同様に砂糖生産の国際競争力は急激に低下している。関税を含めても輸入砂糖の価格は国内産より安い状態だ。

中国は砂糖に関税割当制を導入しているが、194.5万トンの割当枠内の輸入関税は15%と世界で最も低く、割当枠外でも輸入関税は50%にすぎない。中国の砂糖輸入量は急増しており、12年は450万トン前後に達し、世界最大の砂糖輸入国となった。ベトナムなどからは密輸の砂糖の流入もある。中国農業は多くの農産物で輸入の圧力を受けており、政府は国内穀物農家対策に追われているため、さとうきび農家への支持措置はない。先日、中国農業大学の教授とともに沖縄のさとうきび農家、製糖会社を回ったが、その教授は日本のさとうきび農家への手厚い支持政策に驚きを隠さなかった。

中国ではかつて福建省や海南省などでも大量のさとうきび畑があったが、低収益のあまり姿を消し、現在残っているのは経済発展の遅れた広西壮族自治区や雲南省の奥地などだ。とはいえ、さとうきびとビートの生産農家はまだ4,000万戸にのぼり、決しておろそかにはできない。

ただ、国内生産が現状規模を維持できたとしても、低関税水準、WTO加盟条件による農業補助金の制限、中国自身の財政力の限界等により、今後の需要増の大半は輸入に依存せざるを得ず、中国の動向が世界の砂糖市況を揺さぶることになる。世界の注目は穀物などに向けられているが、砂糖の増産が必要になった場合、最大の産地であるブラジルではさとうきびの作付面積を増やすために、アマゾンの原生林を切り拓く可能性がある。関税水準やWTO加盟条件に縛られた中国が次に向かう先が砂糖ならば、世界にとって決して甘い話ではない。

(ルアン ウエイ)